

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-11

二人の男は、目の前にいる娘同然の年恰好のホステスの洗練された接遇に、年甲斐もなく自然と惹きつけられていた。

飲み物が運ばれて、グラスを合わせたところに真紀がやって来ると、そつのない挨拶をすませてからヒデコの隣に座った。

朝倉が慣習的に名刺交換の態勢をとったので、真紀が腰を浮かそうとすると、「朝倉君、野暮なことをするなよ。ここをどこだと思っているんだ」と横田は責め口調で言っ、朝倉を座るように促した。

「大変失礼いたしました。こちらから先にしなければなりませんのに」と言っ立ち上がった真紀は名刺交換をした。

直言を無視された横田は、無然とした面持ちでジントニックを口に運んだ。

真紀の神対応に気をよくした朝倉は、「近くに、こんな素敵な店があるのを知りませんでした。横田さんも人が悪い。大事なゲストを接待する時は、使わせてもらいます」

と満更でもない言いぶりをした。

「今後ともご最良のほどよろしくお願いたします」と真紀は着物の襟もとに手を添えて科をつくり、笑みをこぼしながら言っ。

グラスに当たる氷の音を残してジントニックを飲み干した横田に、「お変わりをお持ちしましょうか」とヒデコが聞い。

「シャンパンを開けたいね。朝倉君、いいだろう？……グラスを四つ」と横田は独り決めして頼んだ。

真紀の目配せを察知したヒデコは、右手を挙げた。

高価（通り相場で十万円）なシャンパンが運ばれてくる前に、ホットワインを空けた朝倉は「スパイスのアレンジが絶妙ですね」と真紀にカクテルが気に入ったことを伝えた。

「ありがとうございます。女性バーテンダーが作るカクテルのファンが何人もいらっやいまして、カウンター席が埋まることもございます」

「女性バーテンダーですか！ご尊顔を拝したいですね」

「入ってくる時に、カウンターの中を見たくせに……」と横田は調子付いた朝倉に嫌味を言っ。

真紀とヒデコが顔を見合わせて微笑んでいると、シャンパンクーラーを運んでくる黒服の後から女性バーテンダーがフルート型シャンパングラスをトレイに乗せて来た。